

研修機関	ナナオ
研修期間	平成20年10月14日～11月13日
所属・氏名	津幡町立津幡小学校 山井 貴嗣

I 研修目的

- ・企業で働く人々の仕事に対する姿勢や心構えを学び、自己の仕事に対する姿勢を新たにすると同時に学んだことを教育活動に生かす。
- ・品質の高さで国内外での高い評価と信頼を得るコンピューター用モニター等の生産工程には、どんな工夫や努力があるのかを知る。

II 研修内容

製造部製造課

10/14 (火)

実習者受け入れ [8:20 ~ 9:00]

- ・製造部門の説明

組立、配膳作業に関する基礎知識と実作業訓練 [9:00 ~ 15:00]

- ・組立/配膳作業の基礎説明
- ・生産ラインの流れ (作業工程フローの説明/ライン見学)
- ・サンプルセットを用いた実作業訓練

製造業務に関する基礎教育 [15:00 ~ 17:15]

- ・製造の役割/目的 (品質、コスト、納期、安全、環境)
- ・生産ラインでの安全/モラルの説明

10/15 (水) ~ 17 (金)

3F32号ラインでの作業実習 (材料配膳、汎用モニター組立)

10/20 (月) ~ 24 (金)

1F11号ラインでの作業実習 (個人向モニター組立、テレビ組立、前加工)

10/27 (月) ~ 31 (金)

4F41号ラインでの作業実習 (アーム組立、地デジチューナー調整、センサー検査、梱包) 質疑応答 (まとめ)

製造部生産管理課

11/4 (火)

資材業務に関する説明、倉庫内レイアウトの説明、倉庫内安全教育、無線端末POT教育

11/5 (水)

荷受検品/納入作業実習、検査合格品、納入異常の処理作業

11/6 (木) ~ 12 (水)

棚資材ピッキング手順の教育、棚材ピッキング作業、棚材格納作業、棚材検品作業
ピッキング実績入力検品作業

11/13 (木)

倉庫見学、生産管理についての質疑応答 [午前]

人事部

11/13 (木)

社内管理体制等についての質疑応答、まとめ [午後]

Ⅲ 研修成果

1 生産に携わる人の思い

製造実習期間中、作業内容や手順を教えていただく時や休憩時間等に従業員の方にお話を伺う機会がしばしばあった。どの方からも自社E I Z Oブランド製品の高い品質に対して誇りをもってお仕事をされていることが伝わってくる。それから、今製造しているこの製品を自分が買って手にしたときに本当にうれしいと感じるだろうか、というお客様の立場に立ったものづくりの姿勢を大切にしているということも教えていただいた。そして、同じ品質を保証できる製品を1日何十台、または百台以上つくり続ける集中力と継続力、ミスがないか常に確認しながら作業を進めるという注意力にも感心した。また、自分だけ頑張ればよいという意識ではなく、同じラインに立つメンバーで歩調を合わせて、時には助け合って課せられた仕事を全体で完遂するという協同意識が浸透していた。

これらの意識が想像以上に高いことが自ら実習してみることでさらにわかってくるのであるが、それには理由がある。一つは「改善」の精神である。製造部門の従業員の方はたくさんいらっしゃるのだが、製造ラインがいくつかあり、各ラインによって組み立てる製品が違っている。そして、そのラインに携わる方にしかわからない作業手順や工夫のポイントがある。最初は誰でも教わった通り、あるいは作業手順を示したモニターを見ながら自分の仕事を進めていくのであるが、時にはそれよりもっと良い方法があることに気がついたり、ある作業が意味のないものではないのかといった疑問をいだいたりすることがある。すると、そのことに気がついているにも関わらず黙って指示されたとおりに作業を進めるのではなく、随時改善内容を書きとめたり話し合ったりして、改善してはどうかと提案するのである。そして、その内容の有効性を競う発表会までである。それが、本当に有効なものであれば製品製造の効率化に大いに役立つが、たとえそこまできなかつたとしても従業員の方の意識には常に「今やっていることははたしてこれでよいのか」「もっと効率的な手順が存在しないか」といった仕事に対する強い当事者意識が働くのである。目には見えないが、これによって生じる効果は大きいであろう。逆に指示されたことだけを何も考えず淡々とこなす仕事の進め方では、従業員や会社の成長に大きな差が出ることは明らかである。

2 開発に携わる人の見識と努力

ナナオでは各学校に教具として置かれているような汎用モニターや大型モニター、または液晶テレビなどを販売している。その他にも専門性の高い航空管制用モニターや医療用モニターなどを製品化している。なかでも、健康診断によく使用されるレントゲンや、医者に診てもらったときに診察室に設置されている医療用モニターなどは白から黒にかけての階調（グレースケール）の鮮明化がポイントとなるそうである。例えば、レントゲン映像では患部は全体からみると白からグレーにかけてのモノクロームで映し出されるのであるが、同じ白でもどんな白で映し出されるかによって医者が判別しやすくなったりしにくくなったり、時には見落としてしまったりすることもあるという。その点を重視して医療用のモニターの開発に取り組んだ時期があったということをお伺った。同様に、黒色に関しては、対象物の黒い色や影の部分をごく同じ一色の黒として映像化するのではなく、より実像に近い何段階にも区別された黒として映像化するという高い技術を可能にしている。これは、これからのモニターに要求されていくことを他社に先駆けて見通す力をもつ技術者の見識があったからできたことというお話を伺った。最近よく耳にする「ナナオのモニターは見やすいらしい」という口こみ情報の根拠はここにあるようである。その結果、見やすいわかりやすいということで医療現場などの市場にどんどん受け入れられている。当然、国内にとどまらず、海外にも拡大していつている。

自分たちのつくりたいものを独善的に開発して市場に売り出し、売れるのを待つという姿勢ではなく、いま市場は何を求め始めているのか、もっとも重視しなければならないことは何かを見極めてものをつくるという姿勢は教育にも通じる概念である。今、目の前にいる児童の実態がどのようなものであるかを十分見極め、どこを褒めて伸ばしてやるのか、どんな点が不足しているからどういう指導をするのかという個に応じた指導や支援ということの大切さを別の分野を通じて改めて学ばせていただいた思いである。教師が自分の理想や根拠のない判断で指導し、それが児童の実態と大きく乖離していたとしたら成長はほとんど期待できないことであろう。ナナオの場合は市場をしっかりと見極めたからこそ、評価される製品の開発に成功したということである。

3 教育と企業

研修日程の前半に配属された製造部製造課には、高等学校卒業と同時に入社してもう14年になるという方のお話を伺う機会があったが、他にも同様に高校卒業からこのお仕事に就かれる方がたくさんいらっしゃるようであった。そこで、現場責任者の方との質疑応答のとき、高等学校卒業者の新入社員につけておいてほしい力は何かとたずねた。返ってきた答えは、「おはようございますの挨拶」「わからない時にはわからないとはっきり言うこと」「同僚や他者との連携、お世話になった時には感謝の気持ちを表すこと」という3点であった。ある程度予想の範囲内ではあったが、はっきりとこれを言われた時、自分は教師として何を見据えて挨拶を教えてきたのだろうかという思いを強くした。現在、あいさつを教えていない学校などどこにもないはずである。あいさつ運動も一般化している。ところが、欠けているものとして1番最初に口にされたのが、挨拶である。高校生が挨拶を適切にできないとなった場合、小学校にその原因がないとは言い切れない。従って、小学校においても教師が考え方を改めてしっかり身につけさせてやってくださいと言われたのと同じことであると感じた。

それから、人事部長さんより会社の組織運営からナナオが大切にしている考え方、社会貢献に至るまで詳細にお話を伺う機会があった。人事部長さんのお話は私が考え及ぶ範囲をはるかに超えてどれも印象的であった。また、そのお話のされ方や人柄についても同様である。中でも強く印象に残ったお話は目的達成のためには、徹底的に無駄を省くということがいかに重要かということについてのお話である。それを怠ると企業というものは最後には必ず倒れてしまうというのである。ところが学校はどうか。利益を上げ続けるという目的と子供を育て上げるという目的の違いこそあれ、その目的達成のためには無駄を省かなければならないという点では同じはずだ。ところが、公立学校は倒産することはない。ここから考えや行動の甘さが生じてくることはないだろうか。私は大いにあるに違いないと考えている。これまでの自分の教育をふりかえっても、当然思い当たることはある。ナナオから教わった「改善」の考えに則して、子どもたちのためになること、ならないことの区別を明確にし、その上でためになることを充実させていかなければならないという思いをさらに強くした。

IV 今後の課題

私は教育に携わって何年か経ち、この先も多くの子どもたちを教えて送り出していくことになるであろうが、その子どもたちはいずれ社会に出て就職することになる。そしてそのほとんどは企業に就職するのである。その企業がどんな様子で、そこで働くためにはどんな力が必要であるのかということを知ることが、教師にとって必要不可欠な条件ではないのだろうかと感じている。

今年の夏にオリンピックが北京で開催されたが、例えばマラソン競技において、教え子である選手がこれから走るというのに、コースの路面がどれほど硬く、どんな起伏がどこにあるのかということをも具体的に指導しない監督などいないであろう。教師は、児童生徒に教育を施し卒業にまで導くという使命を負っているが、それは同時に社会人として歩む長い道のりのスタートラインに立たせるのと同じことではないだろうか。つまり、その先がどうなっているのかを見据えて教育する必要があるのではないかと考えるのである。そのためには、実際に企業に入って、その仕事を体験させていただくということ以外にも様々な方法があるに違いない。しかし、私の場合は、企業研修というかたちでほんの少しだけでも児童生徒の歩む道のりの実際を知ることができた。そのことを教師として感謝するだけでなく、この先出会う子どもたちにどう伝えていくのか、直接伝えても分からないことは、どんな方法で伝わるようにするのかという課題が生まれてきた。授業では教材や単元構成の工夫において、授業以外の学校生活全般でも目の前にいる子どもたちの実態や行動は近い将来のことを考えた時そのままでのよいのか、それともそれではいけないのか判断する基準としてこの経験を生かしていかなければならないと考える。

この研修を教員である私が今受けることの意味は何かということを考えながら仕事をしていた時に気がついたことの一つは、教職と企業での仕事の違いを比較して考えることができるということである。その詳細に関しては、各項目で少しずつ述べさせていただいたが、同時に私自身の見聞を広め研鑽を積むことにつながったということ、そしてその機会を与えてくれたすべての方に深く感謝している。